

の標本の中には、既に田代善太郎氏採集(1915年8月9日)の標品と中島一男氏の採集(1937年8月6日)の2点が共に白岩山産として所蔵されている。恐らく両氏もこの岩峯足下で採集されたものと思う。

(4) **フッキサウ** (*Pachysandra terminalis* Sieb. et Zucc.) 椎葉村倉迫から小溪沿いに小道を下り、耳川の支流に達した所で、水田のすぐ側に洞径約1.4m位の鐘乳洞がある(標高700m)。この穴の入口上の小灌木と笹の茂つた中で7月26日採集した。個体数は5~6本で開花中のものであつた。京都大学所蔵標本中には福岡県英彦山(1935年7月29日採集)と熊本県阿蘇郡野尻村と小国町(兼田氏採集)とのものがあつた。中島一男氏の福岡県植物目録(福岡県林業試験場報告, 第6号, 昭和27年9月)中には犬ヶ岳と英彦山に産し、逸出となつている。採集場所から考えると私の椎葉産のものは栽品の逸出とは考えられない。

(5) **オホヤマサギサウ** (*Platanthera sachalinensis* Fr. Schmidt) 白岩山頂上三角点(標高1646m)の丘陵状山地でブナ、ミヅナラ、クマシデ等の喬木林内のスズタケの稍疎生する地床に散生するものを7月20日採集。個体数はかなりあつた。又白岩山の西南で隣接する熊本県境の国見岳(標高1738m)と五勇山(標高1640m)でも、同様な環境下で7月25日採つた。京都大学の標本中には既に大正2年7月9日緒方松蔵氏が宮崎県西臼杵郡岩戸村で採集のものが収められていた。

(6) **ヤマドリトラノオ** (*Asplenium kobayashii* Tagawa) 椎葉村尾手尾の前記ツルタガラシを得た場所で、乾燥の石灰岩面に生じた貧弱な標本を1本7月26日採集した。標高は約750mである。本種は伊藤洋氏に依れば日本フロラに新加入のものである由である。この附近の石灰岩上でキリンサウ(*Sedum kamtschaticum* Fischer)も採集した。白岩山では標高1640mに生ずるが比較的低い所の例としてこの地帯では面白い。

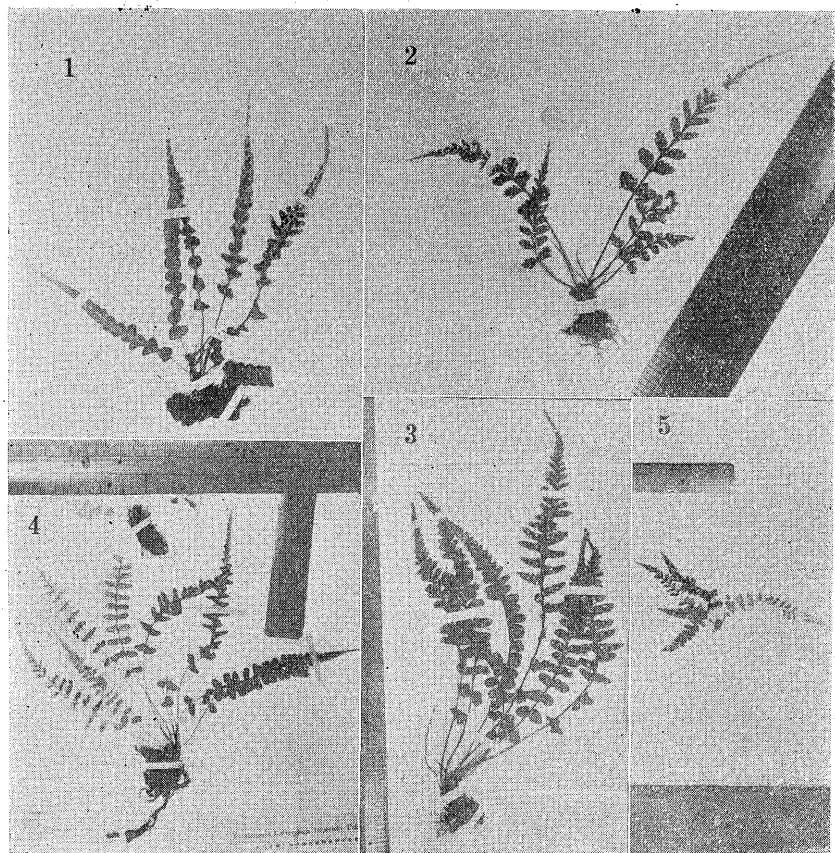
なおこの外白岩山の溪谷の所々で、コウヤシロカネソウに近い種を採集した。しかしこれについては更に花期の標本を得て再検討したい。又白岩山の標高1500~1600mの霧立越の尾根道や、又国見岳や五勇山でナガエコナスビが生育しているのを見た。

終に臨み標本の同定並に種々の教示を頂いた原寛博士、及び伊藤洋博士、標本の閲覧に便宜を与えて頂いた北村四郎博士の三先生に厚く感謝いたします。

**○ヤマドリトラノオ本州に産す** (北沢浅治) Asaji KITAZAWA: *Asplenium kobayashii* Tagawa, newly found in Japan.

昭和26年7月下旬筆者は群馬県伊勢崎市の素封家町田伝七氏の邸宅の一部である、広瀬川畔の多孔質の安山岩の岩壁と関東ロームの絶壁に、我が国で未発見と思はれる *Asplenium* 属の一種の羊歯を発見した。その後先学諸賢の御教示を乞うたが、種名までの同定を得ることが出来なかつた。昭和27年10月国立科学博物館の奥山春季氏を通

して、京都大学理学部植物学教室の田川基二博士に同定を依頼したのが、No. 1, No. 2 及び No. 3 の写真の腊葉標本である。博士は満洲産の *Asplenium kobayashii* に近いものだが、3 株の標本共にそれぞれ種類が異なるのではないかとのことであつた。その後原寛博士の御紹介で東京教育大学理学部植物学教室の伊藤洋博士に鑑定を依頼した結果 *Asplenium kobayashii* であるとの御教示を得たのと、東京大学理学部植物学教室の腊葉標本庫の満洲産の No. 5 の写真の *A. kobayashii* の標本を比較して、伊勢崎産の未



知の羊歯は *A. kobayashii* Tagawa, であるとの結論に到達したのである。この植物は既に 20 余年前に満洲大連市の緑山で小林勝氏が採集したものに田川博士の命名したもので、植物分類地理第 1 巻第 4 号 312~313 頁に発表されたものである。原記載には図がないが、標本を比較すると伊勢崎産の方が稍大きく、且つ形態の変異に富んでゐる

る。伊勢崎市の本種の分布してゐる処は北面の陰地で、僅かに高さ約 3 m 幅約 50 m の小地域であつて、他の場所からは全く発見し得ない状態である。この分布地域には植栽されたものと思はれるものもあるが、トラノオシダ・クモノスシダ・ミツデウラボシ・シノブ・ノキシノブ・イヌワラビ・イヌシダ・カタヒバ・イハヒバ・イハデンダ・ヒトツバ及びキンモウワラビ等の羊歯植物が採集出来るし、更にマサキ・クスノキ・モクセイ・ツバキ及びモミ等の木本が 32 種類、ススキ・ハコベ・ノブドウ・チヂミザサ・ヘクソカツラ及びアカネ等の草木が 54 種も生えてゐる。本種は田川博士も指摘された様に非常に変異に富んでゐるが、伊勢崎産の形態の標準型は No. 4 の写真の植物であり、No. 1 の写真の様に外形がクモノスシダに近いもの No. 2 の如く外形がトラノオシダートキハシダ型のもの、No. 3 の様にホソバシケシダ型の形態のものもある。従つてこれらの点から考察して本種は形態の安定していない雑種ではないかと思はれ、筆者は密かにクモノスシダとトラノオシダの雑種ではないかと想像してゐる。本種の和名は小林氏が満洲産のものにヤマドリトラノオの雅名を与へられた。我が国では伊勢崎市に最初に発見したのを記念して、一名イセサキトラノオを提唱したい。終りに御教示を得た本田正次・伊藤洋・田川基二の諸博士に深謝するものである。

(東京大学理学部植物学教室にて)

# ○*Cynanchum ambiguum* の著者名 (檜山庫三) Kôzô HIYAMA: The oldest author name of *Cynanchum ambiguum*.

西南日本に生ずるアオカモメズルの学名としては今日一般に Maximowicz の命名した *Vincetoxicum ambiguum* に基いて松村任三氏 (『帝国植物名鑑』1912) の組合された *Cynanchum ambiguum* の名が用いられているが、もし属名に *Cynanchum* を採るならば、これと同じ組合せ名が他の学者によつて概にこれより以前につくられているという事実がある。

1897 年に出版された齊田功太郎氏の「大日本 普通植物誌」を見ると *Cynanchum ambiguum* (Maxim.) として既に載つてゐるから年代的にはこの齊田氏のものが一番古いことになると思うが、この書物は有効出版物として疑義があるらしいので、この齊田氏の名には触れぬこととする。そこで、次に古いものとして浮かび上つてくるものは Komarov (『Flora Manshuriae,』1905) のつくつたやはり上記と同様の組合せ名である。Komarov のこの名は松村氏のものよりも明かに古く且つ正当に出版された名であるから、アオカモメズルの学名としては、他に別段の故障のない限りは、*Cynanchum ambiguum* (Maxim.) Komarov を使うべきものであつて、近頃出版された原寛氏の「日本種子植物集覧」や大井次三郎氏の「日本植物誌」には惜しくも見通がされているからここに書きとめておきたい。

*Cynanchum ambiguum* (Maxim.) Komarov, Fl. Mansh. 3: 294 (1905) in